

「インターネット依存」研究の展開とその問題点

小寺 敦之

キーワード：インターネット、携帯電話、中毒、依存、PIU

Internet, mobile phone, addiction, dependence, PIU

国際電気通信 (International Telecommunication Union) の統計によると、2001年に5億人だった世界のインターネット人口はわずか10年余りで5倍へと拡大し、今も勢いを弱めることなく増加を続けている。インターネットは、教育やビジネスだけでなく、娯楽や対人関係に至るライフスタイルにも多大な影響を及ぼしており、インターネット利用を前提とした人々の生活様式もまた定着しつつある。

インターネットが人々の社会生活に及ぼすポジティブな影響は少なくないが、そのネガティブな側面についても普及の初期段階からたびたび指摘されてきた。とりわけ、その過度な利用と傾倒は「インターネット依存」と呼ばれ、政府や民間組織が対策に力を入れる事態を招いている。韓国では、情報文化振興院が2002年から「インターネット中毒予防相談センター (I WILLセンター)」を設け、日本でも2011年に久里浜医療センターがネット依存治療研究部門を開設するなど、「インターネット依存」は治療の対象としても認識されるようになってきている。

だが、「インターネット依存」に関する調査や提言は数多く行われているものの、この概念の学術的検討は未だほとんど行われていない。「インターネット依存」とは何を指すのかという議論に先行して、「インターネット依存」という病理が蔓延しているという認識が広まっているのである。もし「インターネット依存」が危惧されるべき病理であり、その対策が求められるとするならば、「インターネット依存」とはどのような病理であり、どのようなメカニズムで生じるのかという議論を成熟させることが必要だと思われる。

本論文では、「インターネット依存」研究の批判的検討を通じて、同研究の現状と問題点を明らかにする。なお、「携帯電話依存 (ケータイ依存)」や「SNS依存」といった派生語も「インターネット依存」と問題点を共有していることから、本論文ではこれらを一括りに「インターネット依存」と捉えることとする。

1. 「インターネット依存」研究の歴史的展開

「インターネット依存」は、いわゆる一般的な依存症とは異なり、現時点においても正式な精神医学的病理としては認められていない（何を「正式な」基準とするかという問題はあがるが、少なくともアメリカ精神医学会（American Psychiatric Association）が発行するDSM（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorder）には「インターネット依存」は採録されていない）。そこで、まず「インターネット依存」の概念はどこから生まれ、どのように研究が進められてきたかを概観することで、現在の「インターネット依存」研究が置かれている立場を明らかにする。

(1) 「インターネット依存」研究の始まり

オンラインコミュニティへの没頭を「中毒（addiction）」と表現したRheingold（1993）にも見られるように、「インターネット依存」に類する概念自体はインターネットが広く利用される前から存在していたが、現代的意味での「インターネット依存」は、アメリカの精神科医Ivan Goldbergが、DSM-IV（American Psychiatric Association, 1994）の病的ギャンブル（pathological gambling）の基準をインターネットに当てはめたのが始まりとされる。Goldberg自身はこれを「冗談」あるいは「パロディー」として提示したようだが、これが思わぬ反響を呼ぶこととなり、「インターネット依存」は確かに存在するとの議論へと熱を帯びていった（Davis et al., 2002; Grohol, 1998; Wang, 2001）。

この盛り上がりや学術的議論に押し上げたのが、Kimberly Youngである。Young（1996a）は「インターネット依存」が若い内向的男性だけの問題ではないことを紹介して、これを新たな臨床的課題であると位置付けた。Youngは、「インターネット依存」を衝動制御障害（impulse-control disorders）の一種と捉え、「インターネット依存」を自己評定する尺度Diagnostic Questionnaire（以下、DQ）を作成して「インターネット依存」の可視化を図った（Young, 1996b）。DQは、DSM-IVの病的ギャンブル基準10項目からインターネットにそぐわない2項目を除外した8項目を読み替えたものであり、5項目以上が該当すれば「インターネット依存」と判定される。Youngはその後DSM-IVの病的ギャンブルと物質関連障害（substance-related disorders）の基準をベースとした20項目（5段階尺度）から成るInternet Addiction Test（以下、IAT）も開発しており（Young, 1998）、DQとIATは後の「インターネット依存」に関する調査で多用される尺度となっていく。

Youngが衝動制御障害のアナロジーを用いるのに対して、行動依存（behavioral addiction）の観点から「インターネット依存」を捉えたのがGriffiths（1998）である。行動依存とは、過剰摂取が障害を生むという物質依存のモデルを一般的行動に拡大する考え方である（Marks, 1990）。Griffiths（1998）は、行動依存の6基準はインターネットを対象としたときも有効

であり、これにより「インターネット依存」の判断が可能であるとした。すなわち、対象の最重要視 (salience)、利用時の情緒安定 (mood modification)、耐性強化の発生 (tolerance)、禁断症状の出現 (withdrawal symptoms)、他行動との葛藤 (conflict)、再発 (relapse) といった症状がインターネット利用に際しても認められれば、それは行動依存と考えられるというわけである。

これら先駆的な「インターネット依存」研究には、その後の展開に影響を及ぼすことになる幾つかの共通項が見られる。ひとつは、「インターネット依存」自体の検討をほとんど行っていないことである。衝動制御障害と捉えるか、あるいは行動依存と捉えるかというアプローチは異なるものの、いずれもが「他の行動と似ている」という周辺的理由で「インターネット依存」を規定しようと試みている。「インターネット依存」は、その概念の出発地点から、それ自体が何であるかという議論に踏み込んでいないのである。

もうひとつは、インターネット利用を多くの問題行動の「原因」として扱う方向付けをしたことである (Grohol, 1998)。後述するように、インターネットが精神的健康に影響を及ぼすという一方向的な因果関係は証明されていない。だが、「インターネット依存」という概念は、インターネットを有害なものとして位置づけることに絶大な効果を見せた。その仮説的な因果関係は、後の「インターネット依存」研究の趨勢を規定していくのである。

(2) 「インターネット依存」研究の展開

「インターネット依存」の問題が提起されると、その病理を生む要因についての研究も精力的に進められていった。

最も一般的なのは、YoungのDQやIATに代表される尺度を「インターネット依存」の従属変数として、他の社会的・心理的変数との関係を分析するものである。独立変数となるのは、鬱 (depression) や孤独感 (loneliness) などの精神的健康、あるいは自尊心 (self-esteem) や自己効力感 (self-efficacy) を含むパーソナリティに関するものが多い (Cao & Su, 2006; Caplan, 2002; Kim et al., 2006; Lin & Tsai, 2002; Morahan-Martin & Schumacher, 2000; Wang, 2001; Whang et al., 2003; Yang & Tung, 2007; Young & Rogers, 1998; 伊藤, 2009; 大野, 2012; 鄭, 2008)。これらの研究には、「インターネット依存」を生み出す背景には精神的・人格的問題があり、問題がある人の方が「インターネット依存」に陥りやすいという問題意識や仮説が共有されていると見られる。

また、「インターネット依存」と利用時間・コンテンツなどとの関係を探る試みもある。ここでは、インターネットに接触する時間が長いほど影響が強くと考えられていたり、あるいは「インターネット依存」に陥りやすいコンテンツが存在すると想定されている (Bayraktar & Gün, 2007; Chou & Hsiao, 2000; Davis et al., 2002; Leung, 2004; Morahan-

Martin & Schumacher, 2000; Pratarelli et al., 1999; Siomos et al., 2008; Song et al., 2004; Wang, 2001; Yang & Tung, 2007; Young, 1996b; 橋元ほか, 2002; 堀川ほか, 2012)。接触する対象の種類や量によって依存度が高まるというモデルは、ギャンブルや薬物の依存をモチーフとした「インターネット依存」にとっては、その概念に根拠付けをする意味で親和性が高いと思われる。

いずれにせよ、現代社会病理という問題意識のもとで「インターネット依存」の研究は蓄積されており、カナダ (Davis et al., 2002; Nichols & Nicki, 2004)、オーストラリア (Wang, 2001)、オランダ (Meerkerk et al., 2009)、ノルウェー (Johansson & Götestam, 2004)、ギリシャ (Siomos et al., 2008)、ハンガリー (Demetrovics et al., 2008)、キプロス (Bayraktar & Gün, 2007) といった西洋圏に加え、近年では、韓国 (Kim et al., 2006; Whang et al., 2003)、台湾 (Lin & Tsai, 2002; Yang & Tung, 2007; Chou & Hsiao, 2000)、香港 (Leung, 2004)、中国 (Cao & Su, 2006) といった東アジア地域での積極展開が目立つ。「インターネット依存」は、国際的に関心が高いテーマとなり、社会問題として広く認識されるようになったのである。

2. 「インターネット依存」研究の問題点

歴史的展開を見ても分かるように、「インターネット依存」は理論的な下支えを有していない。これは学術的概念としての不安定さにもつながっているだけでなく、「インターネット依存」そのものが存在するのかという批判にもつながっている。

以下では、複数の観点からこの概念の問題点を示し、「インターネット依存」研究が取り組まねばならない課題を明らかにしていきたい。

(1) 「インターネット依存」の定義の問題

本論文では便宜上「インターネット依存」で統一してきたが、これに類する用語には一貫性がない。現時点においても、「インターネット依存」を指す言葉は統一されておらず、また正式に受け入れられている呼び名もない (Chou et al., 2005; Morahan-Martin & Schumacher, 2000)。

「インターネット依存」の発想が生まれた頃は、これに addiction の語が充てられていた (Griffiths, 1998; Kandell, 1998; Young, 1996a, 1996b, 1998; Young & Rogers, 1998)。現在でも、addiction を用いるものが圧倒的に多い (Cao & Su, 2006; Chou & Hsiao, 2000; Johansson & Götestam, 2004; Kim et al., 2006; Siomos et al., 2008; Song et al., 2004; Whang et al., 2003; Yang & Tung, 2007)。

だが、addiction は「物質への生理学的依存を指す言葉であり、DSM-IV でも病的利用の意

味では使用されておらず、病的ギャンブルに対しても使われていない」(Davis, 2001)。DSM-IVでは、物質関連障害の項目に、依存 (dependence)・乱用 (abuse)・中毒 (intoxication)・離脱 (withdrawal) があり、衝動制御障害の項目のひとつとして病的ギャンブルがある。「インターネット依存」の概念が参照してきた部分に addiction の語は使われていないのである。

このことから、「インターネット依存」は当初から病理としての定義に抵触しない形で生み出され、病理として認識されるようになったかなり恣意的な概念であると見ることができると。とりわけ「インターネット依存」の生みの親である Young が DSM-IV を尺度構成に転用しつつも、DSM-IV 自体の枠組みを無視していることは指摘しておくべきであろう。DSM-IV から DQ への転用過程で消された項目についてその理由は説明されておらず (Beard & Wolf, 2001)、IAT も DSM-IV における複数の疾患の基準から恣意的に選ばれた項目で尺度が構成されている。つまり、「インターネット依存」は何らかの理論的根拠をもとに提起されたのではなく、目の前で繰り返らされている行動をラベリングするために生まれた概念に過ぎないと言えるのである。

したがって、「インターネット依存」を addiction とする必然性はない。実際に、Internet Dependence (Lin & Tsai, 2002)、あるいは Internet Abuse (Morahan-Martin, 2005) と表現することもある。さらに、Internet Addiction Disorder (Wang, 2001) という語に至っては、病理を示す語が重複利用されていて曖昧性の詭りを免れない (Wallace, 1999)。近年では、これらの批判から距離を置きながら同様のインターネット利用の在り方を表現するために、Pathological Internet Use (Davis, 2001; Morahan-Martin & Schumacher, 2000; Bayraktar & Gün, 2007)、あるいは Problematic Internet Use (Davis et al., 2002; Demetrovics et al., 2008; Caplan, 2002; Shapira et al., 2000) を使用する傾向がある。

これら用語の多様性はインターネット利用についての異なった理解を反映したものであり (Beard & Wolf, 2001)、いわば「インターネット依存」自体に標準的な定義が存在しないという背景を改めて示すものでもある。「インターネット依存」研究に向けられる最も大きな批判は「インターネット依存」とは何かという定義が与えられていないというものであるが (Byun et al., 2009; Caplan, 2002; Chou et al., 2005; Meerkerk et al., 2009)、「インターネット依存」を病理として扱うのであれば、その言葉や理解が多様であることを是認することは難しい。また、既存の学術用語・診断用語を用いるのであれば、そこにはやはり既存の用語に則した定義が求められよう。「pathological Internet use が addiction の原因」(Young & Rogers, 1998) とされるなど、用語の関係性も不明瞭である。定義が不在という状況は、調査の解釈や比較を困難にするだけでなく、操作的定義や臨床的妥当性にも関わる (Demetrovics et al., 2008; Weinstein & Lejoyeux, 2010)。「インターネット依存」研究は、「インターネット依存」を十分に説明しないまま、その病理が存在するという前提で

議論を進めているのである。

(2) 「インターネット依存」尺度の問題

「インターネット依存」の定義がないということは、「インターネット依存」についての信頼性と妥当性を持った診断基準がないことをも意味する (Weinstein & Lejoyeux, 2010)。それにもかかわらず、現状では「インターネット依存」か否か、あるいは「インターネット依存」の度合いはどの程度のものかを測る尺度の開発が積極的に進められている。

先述したDQ (Young, 1996b) やIAT (Young, 1998) と同時期のものとしては、Brenner (1997) のInternet Related Addictive Behavior Inventory (IRABI) が挙げられる。これは「DSM-IVの物質乱用 (substance abuse) に類似」した32項目の尺度である。DSM-IVから転用する形で作成された他の尺度としては、DQの診断基準を修正したBeard & Wolf (2001)、DSM-IVの物質依存 (substance dependence) とGriffith (1998) の基準を合わせたNichols & Nicki (2004) のInternet Addiction Scale (IAS)、IATに項目を付加して3つのサブカテゴリーを設けたDementovics et al. (2008) のProblematic Internet Use Questionnaire (PIUQ) がある。先述したように、DQはDSM-IVの病的ギャンブル基準を、IATは病的ギャンブル基準と物質関連障害基準を参照しているが、他の尺度でもDSM-IVの参照箇所に一貫性はない。尺度によって参照元が異なるということは、やはりインターネット利用の基盤に何かあるかという理論的下支えがないことの裏返しでもある (Weinstein & Lejoyeux, 2010)。物質関連障害か衝動制御障害か、あるいは別の障害なのかといった議論の起点が存在しない以上、作成される尺度が多様になるのは当然であり、これが各尺度の妥当性評価を困難にしているのである。当然ながら、このような状況での尺度の信頼性は低いと言わざるを得ない。

インターネット利用によって生じる可能性のある問題行動13項目を用いたMorahan-Martin & Schumacher (2000) のPathological Internet Use Scale (PIUS) という例外はあるものの、Wang (2001) のInternet Addiction Disorder Questionnaire (IADQ)、Caplan (2002) のGeneralized Problematic Internet Use Scale (GPIUS)、Davis et al. (2002) のOnline Cognitive Scale (OCS)、そしてMeerkerk et al. (2009) のCompulsive Internet Use Scale (CIUS) など、2000年代に入ってから開発された尺度の多くも、既存研究の項目を組み合わせたり、選抜したりすることで構成されている。言い換えれば、現在開発されている尺度のほとんどはDSM-IVの転用にその起源を求めることができるのであり、現在の「インターネット依存」はDSM-IVに記載されている他の疾患に似ているかという、かなり曖昧な基準で判断されているということになる。

DSM-IVに準拠して「インターネット依存」を診断することについては多くの批判がある

(Weinstein & Lejoyeux, 2010)。最も直接的なのは「DSM-IVにインターネット依存が含まれていないのに、この基準が転用されている」(Byun et al., 2009) というものである。「インターネット依存」が精神疾患として存在するならばDSMに記載されるべき対象となるが、2013年にリリースされたDSM-Vでも掲載は見送られた。DSM-IVが発行された1994年ではなく、インターネット利用が一般的になった現在でも「インターネット依存」は正式な疾患として認められなかったのである。

物質関連障害や衝動制御障害など「インターネット依存」が準拠する精神疾患との比較検討を省略してDSM-IVを転用する根拠が不明であるという批判もある (Beard & Wolf, 2001)。また、病的ギャンブルについての研究もまだ途上であり、それを「インターネット依存」と同類のものであると判断するのは時期尚早であるという意見もある (Shaffer et al., 2000)。

これら尺度の根拠の問題に加えて指摘しておかねばならないのは、「インターネット依存」は果たして上述したようなセルフチェック尺度で計測することが可能なのかという問題である。DSM-IVに記載されている多くの精神疾患は、観察や問診を通じて専門家が判断する。だが、現在の「インターネット依存」は「寛大な自己評価」に判定を委ねられている (Song et al., 2004)。「インターネット依存」とDSM-IVの間には、疾患に対する認識で既に大きな違いが生じているのである。「インターネット依存」を社会問題と捉える研究者は、特殊なケーススタディをその根拠として用いることが多いが、その先駆者のYoung (1996a) でさえ、ケーススタディの対象者は「自身のインターネット利用を問題だと見ていない」「行動が尋常でないということを否定した」と報告している。

このような状況からは、何らかの尺度を用いて「インターネット依存」を計測することに必ずしも妥当性があるわけではないことが分かる。定義の不在とそれをどのように測るかという指標の不安定さは、「インターネット依存」の存在そのものへの懐疑を生じさせる。少なくとも、現在の尺度で計測しているものは、依存というよりも熱意や執着という利用者の態度に過ぎないように思われる。

(3) 因果関係の問題

「インターネット依存」研究の一翼は、精神医学・臨床心理分野が担っている。だが、インターネットによる影響論が主流の社会心理学的アプローチに対して、精神医学・臨床心理分野からの知見は、その因果関係が必ずしも明確ではないことを示している。

ひとつは、「インターネット依存」が共存症であるという可能性である。例えば、Shapira et al. (2000) は、インタビューした「インターネット依存」の全ての患者は情緒障害 (mood disorders) や不安障害 (anxiety disorders) など何らかの別の精神医学的症状を有してい

たと報告している。つまり、もともと他の精神疾患を有している人が過剰なインターネット利用に陥る可能性があるというわけである。もし過剰なインターネット利用が別の原因で生じるのであれば、それは「インターネット依存」とは言えない。インターネットに原因があるわけではないからである。

他の疾患の方が過剰なインターネット利用に関する説明力を有しているとの指摘もあり (Shaffer et al., 2000; Stern, 1999)、少なくとも、今のところは「両者が別の疾患なのか片方が他方の土台となっているのかは分からない」 (Spapira et al., 2003)。だが、そうであれば、「インターネット依存」に問題を矮小化させることは本来の疾患を見逃すという意味で危険だとも言える。

さらに、過剰なインターネット利用は「原因」と「結果」のいずれにも当てはめることができるという指摘もある (Morahan-Martin, 2005; Weinstein & Lejoyeux, 2010)。例えば、孤独感が高い人が「インターネット依存」に陥る傾向にあるのか、インターネットの過剰な利用が孤独感を高めるのかについて明確な結論は見出されていない。Davis (2001) は、病的なインターネット利用は精神疾患の「原因」ではなく「結果」であると考え、Specific Pathological Internet Use と Generalized Pathological Internet Use に区分した。前者は、インターネットがなくても別の行動が発現する疾患であり、インターネット利用はあくまでも本来の病理の実現手段である。例えば、インターネット上での病的なギャンブルや性嗜好は、インターネットがない状態でも別の形で発現し得る。だが、後者は明確な目的なく過度のインターネット利用に走るもので、その背後には見えない病理が存在している可能性がある。その場合は、インターネット利用そのものではなく、やはりそれを通じて発現した背後の病理を探る必要があるという。

「インターネット依存」という言葉には、インターネットの利用が問題行動の「原因」であるという含意があるが、インターネット利用の形で何らかの心理状態が示されているとすれば、問題はインターネット利用自体ではない。インターネット利用と問題行動との因果関係は未だ推測の域を出ていないのである。

(4) 依存メカニズムの問題

依存症のアナロジーをインターネットに適用するときの問題となるのは、「インターネット依存」は果たして「インターネットへの依存」なのだろうかという点である。アルコールやニコチンと異なり、インターネットには生理学的に依存性を高める物質は存在しない。「インターネットそのものは、情報や影響の源泉ではないので依存の対象にはならない」 (Shaffer et al., 2000) のである。また、全てのコンテンツに依存しなければ「インターネット依存」とは呼べないという指摘もある (Stern, 1999)。つまり、「インターネット依存」と言うた

き「人は何に依存しているのか」(Griffiths, 1998)を明らかにすることも「インターネット依存」を考えるに際して重要な課題だと言える。

「インターネット依存」研究では、一般的に「利用時間をインターネット依存を規定する重要な要素と見ている」(Chou et al., 2005)。しかし、複数の調査研究が「インターネット依存」に陥りやすいコンテンツが存在するという事も明らかにしており (Chou & Hsiao, 2000; Siomos et al., 2008; Wang, 2001; Yang & Tung, 2007; Young, 1996b; 大野ほか, 2011)、チャットやメール、オンラインゲームやSNSなどの双方向的コミュニケーションが過剰な利用を促しているという見方が支持されつつある。いくつかの調査で見られる性差もインターネット上での活動の違いによって生じている可能性があると言われており (Chou et al., 2005)、インターネットで何をするか注目しなければ「インターネット依存」の実相を見誤る可能性がある (Morahan-Martin, 2005)。

これについては、先駆者であるYoung (1996b)も「インターネット自体に依存するのではなく、特定のアプリケーションが重要な役割を果たしている可能性がある」と言及している。つまり、「インターネット依存」研究の初期段階から「インターネットへの依存」は考えられていなかったと言える。だが、これはインターネットではなく「チャット依存」「メール依存」「オンラインゲーム依存」「SNS依存」というアプリケーションやサービスに対する依存と読み替えればよいという問題ではない。アルコールやニコチンは程度の差はあるとしても、全ての人にとって生理的に依存性のある物質である。一方、インターネットは「全ての人が依存するわけではない」(Pratarelli et al., 1999)だけでなく、「過度な利用も多くの人にとってほとんど問題行動にならない」(Griffiths, 1998)。過度の利用が「必ずしも薬物依存に見られる症状に帰結するわけでもない」(Beaed & Wolf, 2001)。依存性物質の種類や摂取頻度と同様にインターネット上のコンテンツや利用時間が人々の精神的健康に影響を及ぼすという「インターネット依存」のモデルでは、人々のインターネット利用を適切に説明することは難しいのである。

むしろ、過度なインターネット利用は、依存症のアナロジーではなく、条件付けから説明する方が説得的である (Bradley, 1990; Shapira et al., 2003; Wallace, 1999)。つまり、インターネットでは少数派の興味を共有すること、自分を肯定してくれる仲間を見付けること、現実世界とは別の人格で活躍すること、悪口や暴力的行為でストレスを発散することが可能になる。また、オンラインゲームは、それ自体がオペラント条件付けを基盤として設計されている。これらにおける成功体験が報酬となって行動を強化して反復行動を導くわけである。Davis (2001) のCognitive-behavioral Modelは、インターネット上での成功体験と強化、その背後にある精神病理 (psychopathology) がそれぞれ条件となってPathological Internet Useを生み出すという「インターネット依存」のメカニズムを検討した数少ないモ

デルであるが、このような心理学的検討は「インターネット依存」研究が進むべき方向性を示していると思われる。

(5) 研究者の先有的態度の問題

「インターネット依存」研究は、精神疾患のアナロジーでインターネットを捉え続け、その地位を確立させてきた。したがって、「インターネット依存」研究では、「インターネット依存」は治療を要する病理であり、その「原因」であるインターネットの利用には細心の注意を払わねばならないとの主張に収斂する傾向がある。Young (1998) が提示する「回復のための対策」を眺めると、インターネットは自分自身や家族の人生を破壊するかもしれない危険な存在であることが警告されている。

しかし、薬物やギャンブルと違い、インターネットは生活必需品に近い存在になりつつある。薬物やギャンブルのように、規制や遮断によって「原因」を取り除くことは不可能に近い。Orzak & Orzak (1999) も「インターネット依存」は「摂食障害に似たもの」であり「節度ある利用に戻すこと」を治療目的とすべきだと主張しているが、そうであればやはり「インターネット依存」を薬物やギャンブルのアナロジーで捉えるのは適切ではない。

薬物やギャンブルとは性格が異なるにもかかわらず、なぜ「インターネット依存」に同等の位置付けが与えられたのかについては、先駆的研究が有していたインターネットに対する態度から推察することができる。例えばKandell (1998) は「インターネットは逃避手段」であるから「薬物やアルコールと非常に似ている」との論理を展開しており、Young (1996b) も「理解されなかつたり孤独を感じる人は居心地の良さや繋がりを求めてバーチャルな関係を求める」という逃避のメディア観を示している。つまり、これら先駆的な研究者は「インターネットの対人関係は現実世界より劣っているという前提を有していた」(Morahan-Martin, 2005) のであり、それゆえインターネットを病理の源とするアプローチを採ってきたのである。

だが、CMC (computer mediated communication) 研究では、そのような言説は否定されている。CMCがポジティブな対人関係の構築に寄与している事例は数多く報告されており (McKenna & Bargh, 1998; Parks & Floyd, 1996)、テキストメッセージによるやり取りだけでも対面コミュニケーションと同水準の対人関係へと至り得るという知見は、CMC自体が対人関係の優劣を決めるわけではないことを示してもいる (Walther, 1993; Walther & Burgoon, 1992)。「人々は他者との相互作用に時間を費やしている」のであり「研究者がこれらを一般的で健全なものかもしれないという可能性を考慮していない」だけかもしれない (Grohol, 1999)。つまり、「インターネットの病的利用を議論するものは多いが健全利用についてはほとんど言及されない」(Davis, 2001) ように、インターネット利用自体

がネガティブな視点で捉えられてきたのである。

インターネット利用にDSM-IVの基準を用いることへの問題点は先に述べたが、この安易な転用は、多くの行動を「依存」とラベリングする可能性をも生み出している。また、行動依存の枠組みで習慣的形成行動 (habitual forming behavior) を「依存」とすることも、一般的な多くの行動を「依存」に包括してしまう危険性がある (Bradley, 1990)。例えば、Beard & Wolf (2001) は、DQを用いると赤ん坊が生まれたばかりの母親の行動も「依存」になると述べている。「夢中になっている」「費やす時間を増やさないと満足できない」「自身の制御に繰り返し失敗する」「離れるときには憂鬱になる」「予定より長い時間接することがある」というDQの基準は保育中の母親にも当てはまるというわけである。Grohol (1999) も「強い友情や恋愛関係も行動依存に当てはまる」と指摘しており、Rheingold (1993) も「バイオリンを昼夜練習している天才」を例示して「依存モデルを人間の行動範囲に適用するには注意が必要」としている。この論理に従えば、読書好き、野球少年、韓流スターの追っかけ、デイトレーダー、生徒への指導が熱心な教師など、多くの行動が病理の枠組みで括られることとなる。現時点で提示されている「インターネット依存」の判断基準は、これらに通じる広範性を有しているのである。

一般的に、依存状態にある人は、依存対象行動の際に脳内で快楽物質であるドーパミンの放出が確認される (Linden, 2011)。行動依存の存在を主張する研究者は、この類似性に言及するかもしれない。しかし、肝心なことは、ドーパミンの放出は依存の十分条件ではあるが、必要条件とは言えないという点である。依存行動の際にはドーパミンの放出が認められ快楽が生じるが、ドーパミンの放出は依存状態でなくとも生じる。ドーパミン放出を「インターネット依存」の存在根拠とすることには、科学的論理性を超えた考え方が反映されているのである。

以上のように考えると、インターネット自体に問題があるのではなく、インターネット利用を問題と捉える研究者の先有傾向こそが「インターネット依存」の概念を生み出したと言いうことができる。言い換えれば、研究者がインターネット利用という特定の行動を選び、その目立つ利用を「依存」とラベリングしているに過ぎない (Grohol, 1999)。おそらく、「インターネット依存」研究の根源的な問題はこの研究者の先入観にある。「インターネット依存」は、インターネット利用を問題化する格好のキャッチコピーであり、研究者の懸念を表現する最適なラベルだったと考えられるのである。

3. 「インターネット依存」とは何か

「インターネット依存」研究が準拠してきたDSMが同性愛を精神疾患としていた時代から多くの変化を遂げているように、何を病理とするか否かは、社会の合意が生み出すものであ

る (Grohol, 1998)。したがって、「インターネット依存」の存在は必ずしも否定されるものではない。ある種のインターネット利用が病理としての社会的合意を得られるならば、「インターネット依存」も精神疾患のリストに正式に掲載される可能性がある。

一方で、「インターネット依存」という概念自体が、一過性のものになることも予想される。歴史的に「新しいテクノロジーの導入は、常にその影響への不安を伴ってきた」(Morahan-Martin, 2005)。19世紀のラッドライト運動にも見られるように、テクノロジーによる社会変化が反感を買うことは歴史にも珍しくない (Grohol, 1999)。メディア環境の変化においても、1920年代の映画、30年代のラジオ、40～50年代のテレビ、80年代のビデオゲームで、とりわけ子どもへのネガティブな影響への懸念が提起されてきた (Stern, 1999; Wartella, 1988)。日本でも「メディア中毒は、新しいメディアの出現に伴って」次々と出現し、「社会的な問題として新聞紙上ににぎわせ」続けている (和田, 2002)。

特に、テレビについては「テレビ中毒」という形で「インターネット依存」と全く同じ議論が生じてきた事実がある (McIlwraith, 1998; Smith, 1986)。例えば、Kubey & Csikszentmihalyi (2002) は「テレビ中毒は単なる比喩ではない」としてテレビを薬物と同じように考えるべきだと主張した。DSMに準拠して「テレビ中毒」「ビデオゲーム中毒」を計測する研究も散見される (Fisher, 1994; Kubey, 1996)。まさにテレビがインターネットに置き換わっただけの状況が見出せるのである。

現代社会は新しい病理を生み出し続けているのだろうか。社会は「インターネット依存」という病理に向き合い続けていかねばならないのだろうか。

本論文では、「インターネット依存」を巡る議論を批判的に検討してきた。この観点から上記の問いに答えるならば、「インターネット依存」は「テクノロジーへの不安」(Morahan-Martin, 2005) を反映して生み出された概念であると言えることができる。新しいテクノロジーが導入されると、社会はその欠点と悲観的見通しを探る傾向がある (Grohol, 1998)。それは、社会変動に対する動揺であると同時に、新しいテクノロジーの高い可能性を示唆するものでもある。「インターネット依存」を巡る議論は、社会が新しいテクノロジーを導入する際の交渉 (Wartella, 1988) であり、その葛藤の表れであるように思われる。言い換えれば、社会がインターネットを受け入れたときには、「インターネット依存」という概念が消えている可能性が高い。

では、「インターネット依存」研究の価値が消失するのかというと、それもまた短絡的である。「インターネット依存」研究は、多くの問題点を有してはいるものの、インターネット利用の実態や、人々の生活に及ぼす影響などの知見を蓄積してきた。そこにはインターネットという新しいメディアを無批判に喧伝するのではなく、適切に受け入れていくための方略を探るという正当な態度が存在する。

しかし、「インターネット依存」という概念が独り歩きを始め、現時点での脆弱な理論的・実証的根拠をもとに規制や指導に踏み込むような動きに移行するのであれば、それは問題の本質やインターネット社会の方向性を見誤る危険性につながる。仮に「インターネット依存」への対策を講じる必要があるとするならば、まずは逃げ水のような「インターネット依存」の実体を確実に捉え、それが社会的病理であることを証明することが絶対的な条件になろう。

さらに、「インターネット依存」という世俗的な言葉の広がりや「依存」という言葉を相対的に軽くしてしまう危険性についても指摘しておきたい。深刻な精神医学的・臨床心理学的な「依存症」は、公的に病気と診断され、治療の対象となっている。だが、現在の「インターネット依存」という言葉は流行言葉の域を出るものではない。言葉の世俗化が、本来の言葉が持つ重篤性や社会的意味を削ぐのであれば、「インターネット依存」研究が負う責任は決して小さくないと思われる。

参考文献

- American Psychiatric Association (1994) *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders IV*, American Psychiatric Association.
- Bayraktar F. & Z. Gün (2007) Incidence and Correlates of Internet Usage among Adolescents in North Cyprus, *CyberPsychology & Behavior* 10 (2): 191-197.
- Beard, K. & E. Wolf (2001) Modification in the Proposed Diagnostic Criteria for Internet Addiction, *CyberPsychology & Behavior* 4 (3): 377-383.
- Bradley, B. (1990) Behavioural Addictions: Common Features and Treatment Implications, *British Journal of Addiction* 85: 1417-1419.
- Brenner, V. (1997) Parameters of Internet Use, Abuse and Addiction: The First 90 Days of the Internet Usage Survey, *Psychological Reports* 80: 879-882.
- Byun S., C. Ruffini, J. Mills, A. Douglas, M. Niang, S. Stepchenkova, S. Lee, J. Loutfi, J. Lee, M. Atallah & M. Blanton (2009) Internet Addiction: Metasynthesis of 1996-2006 Quantitative Research, *CyberPsychology & Behavior* 12 (2): 203-207.
- Cao, F. & L. Su (2006) Internet Addiction among Chinese Adolescents: Prevalence and Psychological Features, *Child: Care, Health and Development* 33 (3): 275-281.
- Caplan, S. (2002) Problematic Internet Use and Psychosocial Well-being: Development of a Theory-based Cognitive-behavioral Measurement Instrument, *Computers in Human Behavior* 18 (5): 553-575.
- Chou C. & M. Hsiao (2000) Internet Addiction, Usage, Gratification, and Pleasure

- Experience: The Taiwan College Students' Case, *Computers & Education* 35: 65-80.
- Chou C., L. Condrón & J. Belland (2005) A Review of the Research on Internet Addiction, *Educational Psychology Review* 17 (4): 363-388.
- Davis, R. (2001) A Cognitive-behavioral Model of Pathological Internet Use, *Computers in Human Behavior* 17 (2): 187-195.
- Davis R., G. Flett & A. Besser (2002) Validation of a New Scale for Measuring Problematic Internet Use: Implications for Pre-employment Screening, *CyberPsychology & Behavior* 5 (4): 331-345.
- Demetrovics Z., B. Szeredi & S. Rózsa (2008) The Three-factor Model of Internet Addiction: The Development of the Problematic Internet Use Questionnaire, *Behavior Research Methods* 40 (2): 563-574.
- Fisher, S. (1994) Identifying Video Game Addiction in Children and Adolescents, *Addictive Behaviors* 19 (5): 545-553.
- Griffiths, M. (1998) Internet Addiction: Does It Really Exist?, in J. Gackenbach (ed.) *Psychology and the Internet: Intrapersonal, Interpersonal, and Transpersonal Implications*. Academic Press. pp.61-75.
- Grohol, J. (1998) Future Clinical Directions: Professional Development, Pathology, and Psychotherapy On-line, in J. Gackenbach (ed.) *Psychology and the Internet: Intrapersonal, Interpersonal, and Transpersonal Implications*. Academic Press. pp.111-140.
- Grohol, J. (1999) Too Much Time Online: Internet Addiction or Healthy Social Interactions?, *CyberPsychology & Behavior* 2 (5): 395-401.
- Johansson A. & K. Götestam (2004) Internet Addiction: Characteristics of a Questionnaire and Prevalence in Norwegian Youth (12-18 years), *Scandinavian Journal of Psychology* 45: 223-229.
- Kandell, J. (1998) Internet Addiction on Campus: The Vulnerability of College Students, *CyberPsychology & Behavior* 1 (1): 11-17.
- Kim, K., E. Ryu, M. Chon, E. Yeun, S. Choi, J. Seo & B. Nam (2006) Internet Addiction in Korean Adolescents and its Relation to Depression and Suicidal Ideation: A Questionnaire Survey, *International Journal of Nursing Studies* 43 (2): 185-192.
- Kubey, R. (1996) On Not Finding Media Effects: Conceptual Problems in the Notion of an "Active" Audience (with a Reply to Elihu Katz), in J. Hay, L. Grossberg & E. Wartella (eds.) *The Audience and its Landscape*. Westview Press. pp.187-205.

- Kubey, R. & M. Csikszentmihalyi (2002) Television Addiction is No Mere Metaphor, *Scientific American* 286: 74-80.
- Leung, L. (2004) Net-generation Attributes and Seductive Properties of the Internet as Predictors of Online Activities and Internet Addiction, *CyberPsychology & Behavior* 7 (3): 333-348.
- Lin S. & C. Tsai (2002) Sensation Seeking and Internet Dependence of Taiwanese High School Adolescents, *Computers in Human Behavior* 18 (4): 411-426.
- Linden, D. (2011) *The Compass of Pleasure: How Our Brains Make Fatty Foods, Orgasm, Exercise, Marijuana, Generosity, Vodka, Learning, and Gambling Feel So Good*. Viking. (岩坂彰 (訳) 『快感回路—なぜ気持ちいいのか なぜやめられないのか』 河出書房新社)
- Marks, I. (1990) Behavioural (Non-chemical) Addictions, *British Journal of Addiction* 85: 1389-1394.
- McIlwraith, R. (1998) “I’m Addicted to Television”: The Personality, Imagination, and TV Watching Patterns of Self-identified TV Addicts, *Journal of Broadcasting & Electronic Media* 42 (3): 371-386.
- McKenna, K. & J. Bargh (1998) Coming Out in the Age of the Internet: Identity “Demarginalization” through Virtual Group Participation, *Journal of Personality and Social Psychology* 75(3): 681-694.
- Meerkerk G., R. Van Den Eijnden, A. Vermulst & H. Garretsen (2009) The Compulsive Internet Use Scale (CIUS): Some Psychometric Properties, *CyberPsychology & Behavior* 12 (1): 1-6.
- Morahan-Martin, J. (2005) Internet Abuse: Addiction? Disorder? Symptom? Alternative Explanations?, *Social Science Computer Review* 23 (1): 39-48.
- Morahan-Martin, J. & P. Schumacher (2000) Incidence and Correlates of Pathological Internet Use among College Students, *Computers in Human Behavior* 16 (1): 13-29.
- Nichols L. & R. Nicki (2004) Development of a Psychometrically Sound Internet Addiction Scale: A Preliminary Step, *Psychology of Addictive Behaviors* 18 (4): 381-384.
- Orzack, M. & D. Orzack (1999) Treatment of Computer Addicts with Complex Comorbid Psychiatric Disorders, *CyberPsychology & Behavior* 2 (5): 465-473.
- Parks, M. & K. Floyd (1996) Making Friends in Cyberspace, *Journal of Communication* 46(1): 80-97.
- Pratarelli M., B. Browne & K. Johnson (1999) The Bits and Bytes of Computer/Internet Addiction: A Factor Analytic Approach, *Behavior Research Methods, Instruments, &*

- Computers* 31 (2): 305-314.
- Rheingold, H. (1993) *The Virtual Community: Homesteading on the Electronic Frontier*. Addison Wesley. (会津泉 (訳) 『バーチャルコミュニティ—コンピューター・ネットワークが創る新しい社会』 三田出版会)
- Shaffer H., M. Hall & J. Bilt (2000) “Computer Addiction”: A Critical Consideration, *American Journal of Orthopsychiatry* 70 (2): 162-168.
- Shapira N., T. Goldsmith, P. Keck, U. Khosla & S. McElroy (2000) Psychiatric Features of Individuals with Problematic Internet Use, *Journal of Affective Disorders* 57: 267-272.
- Shapira N., M. Lessig, T. Goldsmith, S. Szabo, M. Lazowitz, M. Gold & D. Stein (2003) Problematic Internet Use: Proposed Classification and Diagnostic Criteria, *Depression and Anxiety* 17: 207-216.
- Siomos K., E. Dafouli, D. Braimiotis, O. Mouzas & N. Angelopoulos (2008) Internet Addiction among Greek Adolescent Students, *CyberPsychology & Behavior* 11 (6): 653-657.
- Smith, R. (1986) Television Addiction, in J. Bryant & D. Zillmann (eds.) *Perspectives on Media Effects*. Lawrence Erlbaum Associates. pp.109-128.
- Song I., R. LaRose, M. Eastin & C. Lin (2004) Internet Gratifications and Internet Addiction: On the Uses and Abuses of New Media, *CyberPsychology & Behavior* 7 (4): 384-394.
- Stern, S. (1999) Addiction to Technologies: A Social Psychological Perspective of Internet Addiction, *CyberPsychology & Behavior* 2 (5): 419-424.
- Wallace, P. (1999) *The Psychology of the Internet*. Cambridge University Press. (川浦康至・貝塚泉 (訳) 『インターネットの心理学』 NTT出版)
- Walther, J. (1993) Impression Development in Computer-Mediated Interaction, *Western Journal of Communication* 57(4): 381-398.
- Walther, J. & J. Burgoon (1992) Relational Communication in Computer-Mediated Interaction, *Human Communication Research* 19(1): 50-88.
- Wang W. (2001) Internet Dependency and Psychosocial Maturity among College Students, *International Journal of Human-Computer Studies* 55 (6): 919-938.
- Wartella, E. (1988) The Public Context of Debates about Television and Children, *Applied Social Psychology Annual* 8: 59-68.
- Weinstein A. & M. Lejoyeux (2010) Internet Addiction or Excessive Internet Use, *The*

- American Journal of Drug and Alcohol Abuse* 36: 277-283.
- Whang L., S. Lee & G. Chang (2003) Internet Over-users' Psychological Profiles: A Behavior Sampling Analysis on Internet Addiction, *CyberPsychology & Behavior* 6 (2): 143-150.
- Yang S. & C. Tung (2007) Comparison of Internet Addicts and Non-addicts in Taiwanese High School, *Computers in Human Behavior* 23 (1): 79-96.
- Young, K. (1996a) Addictive Use of the Internet: A Case that Breaks the Stereotype, *Psychological Reports* 79: 899-902.
- Young, K. (1996b) Internet Addiction: The Emergence of a New Clinical Disorder, paper presented at the 104th annual meeting of the American Psychological Association.
- Young, K. (1998) *Caught in the Net: How to Recognize the Signs of Internet Addiction- and a Winning Strategy for Recovery*. John Wiley & Sons. (小田嶋由美子 (訳) 『インターネット中毒—まじめな警告です』毎日新聞社)
- Young, K. & R. Rodgers (1998) The Relationship between Depression and Internet Addiction, *CyberPsychology & Behavior* 1 (1): 25-28.
- 橋元良明・辻大介・石井健一・金相美・木村忠正 (2002) 「インターネット・パラドクス」の検証—インターネットが精神的健康・社会的ネットワーク形成に及ぼす影響 『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』 18: 335-485.
- 堀川裕介・橋元良明・小室広佐子・小笠原盛浩・大野志郎・天野美穂子・河井大介 (2012) 中学生パネル調査に基づくネット依存の因果的分析 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究 (調査研究編)』 28: 161-201.
- 伊藤将晃 (2009) 大学生のインターネット中毒傾向に関する研究 『関西学院大学臨床教育心理学研究』 35: 9-14.
- 大野志郎 (2012) インターネット依存者の性格分析—コミュニケーション依存とコンテンツ依存 『臨床精神医学』 41(11): 1615-1621.
- 大野志郎・小室広佐子・橋元良明・小笠原盛浩・堀川裕介 (2011) ネット依存の若者たち、21人インタビュー調査 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究 (調査研究編)』 27: 101-139.
- 和田正人 (2002) 大学生のインターネット中毒とインターネット不安の関連についての実証的研究 『東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』 26: 199-207.
- 鄭艶花 (2008) インターネット依存傾向と日常的精神健康に関する実証的研究 『心理臨床学研究』 26(1): 72-83.

Internet Addiction: Critical Review and Considerations.

KOTERA Atsushi

As Internet use has proliferated worldwide, maladaptive patterns or negative impacts of Internet use, so-called Internet addiction, have been increasingly reported. This study critically reviewed literature and discussed some problems regarding the study of Internet addiction.

Development of Internet addiction research and criticism of this subject indicates that the research to date on Internet addiction 1) has no theoretical background, 2) lacks valid measurement, 3) may have presented misleading causal relationships, 4) has restricted research with a psychiatric paradigm, and 5) has been debated on the presumption that the Internet has brought negative consequences. If Internet addiction truly exists, researchers must respond to these problems.

Keywords: Internet, mobile phone, addiction, dependence, PIU